

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 鈴木 徹也

鈴木徹也氏の「ウィトゲンシュタインの三つの思考の系譜と『確実性の問題』」は、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの最晩年の草稿『確実性の問題』に対して新しい解釈を提示する論文である。ウィトゲンシュタインの哲学は、通常、『論理哲学論考』に代表される「前期」と『哲学探究』に代表される「後期」と呼ばれる時期に区分されるが、近年、最晩年の『確実性の問題』がクローズアップされ、「第三のウィトゲンシュタイン」と呼ばれるようになってきた。鈴木氏はそうした潮流とまさに同時並行的に研究を進めてきた。その成果をまとめたものが、本論文である。

『確実性の問題』の解釈における鈴木氏の独自性を、細部はともあれその大まかな方向においてあらかじめ述べておくならば、次の二点が挙げられる。

① 後期ウィトゲンシュタイン全体を視野に入れ、そこに三つの思考の系譜を見て取り、従来そのどれか一つの系譜だけから『確実性の問題』を読み解こうとするものがほとんどであったのに対し、鈴木氏は特定の思考の系譜上に『確実性の問題』を位置づけるのではなく、総合的に捉える。

② 『確実性の問題』は、われわれの認識の確実性において独特な確実性の領域があることを問題にした著作であるが、従来その独特な確実性はあくまでも「公的な確実性」、すなわち、なんらかの実践を共有するメンバー全体、換言すれば、共同体全体に共有される確実性であるとされてきた。これに対して鈴木氏は、『確実性の問題』の後半においてウィトゲンシュタインは「私的な確実性」と呼びうるものに着目し、考察を進めようとした、と考える。

こうした鈴木氏の新たな方向性については、審査委員全員が高く評価した。以下、論文の内容に沿いながら、評価すべき点といまだ不足であると指摘された点を述べる。

全体は三部から構成されている。第一部では、後期ウィトゲンシュタイン全体を視野に入れ、そこから三つの思考の系譜を取り出す。そのさい鈴木氏がとった方法は、後期ウィトゲンシュタインにおいて中心的とみなされる「規則のパラドクス」と呼ばれる議論に焦点を当てるというものである。鈴木氏は、規則のパラドクスに対する多数の二次文献を分析し、それらの文献において「共同体説的」「自然本性説的（自然主義的）」「沈静主義的」と呼ばれる三つの論じ方を取り出し、さらにそれをウィトゲンシュタイン自身のテキストに即して検証した上で、それぞれが後期ウィトゲンシュタインに見出せる思考の系譜であることを確認する。それらの考え方が鈴木氏が論じるほど明確に区別しうるのだろうかという疑問も出されたが、しかし、この三つの思考の系譜を明示的に取り出し、俯瞰的に整理してみせたことは、本研究の為した貢献の一つである。

第二部では、『確実性の問題』の解釈における先行研究の批判的検討が為される。『確実性の問題』には、すでに「教科書的」と言ってもよい解釈が存在するが、鈴木氏はそ

それを標準解釈と呼び、それを踏まえつつも、その標準解釈を越えた『確実性の問題』解釈の新しい潮流を分析、検討する。そしてそこから標準解釈には見られない新しい方向性として、『確実性の問題』を自然主義的に解釈するという方向と、『確実性の問題』の内に「私的確実性」と呼ばれうる独特な確実性の領域を見出し、重視していく方向を取り出す。しかし、それらは別の論者によって別々に論じられているにすぎず、そうした方向を統合した統一的な解釈の必要性が課題として確認される。ここにおける鈴木氏の先行研究の扱いは目配りの利いた手堅いものであり、それを踏まえた課題設定も妥当なもの認められる。

第三部と第四部では、以上を踏まえて鈴木氏自身の解釈を提示していく。第三部では、「公的確実性」について、『確実性の問題』がしだいに共同体説的思考と自然主義的思考という二つの系譜を統合する形で展開していくと指摘し、自然本性と共同体における承認とをともに組み込んだ形で、鈴木氏自身の統一的解釈を提示するに至る。ここでは、共同体説で言われる「共同体」というものがいったいどのようなものなのか、また、自然主義的な考え方において言われる「自然本性」とはどのようなものであるのかについて、より踏み込んだ考察がほしいとの意見もあったが、本論文が設定した『確実性の問題』の解釈という点においては、十分な成果があげられていると評価できる。

第四部は、共同体のもとに見て取られる公的確実性に対して、個人のもとに見て取られる「私的確実性」について論じられる。この論点自身は鬼界彰夫氏が指摘し、論じるころでもあるが、鈴木氏は、私的確実性を公的確実性の基礎におこうとする鬼界氏の議論を批判し、むしろ逆に公的確実性から私的確実性へというルートで、ウィトゲンシュタインの考察を辿ろうとする。

私的確実性という議論は、これまで鈴木氏と鬼界氏以外の解釈者たちによっては論じられてこなかった新しい問題であり、きわめて重要な問題であると言える。しかし同時に、私的確実性という問題はウィトゲンシュタイン自身が死ぬ間際まで進めようとしていた考察であり、テキスト上はあまり多くのことが語られていない。それゆえ、テキスト解釈として論じることには限界があり、本論文は解釈としては十分な達成をみたと言えるが、そこからさらに、ことがらそのものとして、私的確実性がいかなるものであり、それはどのような意味をもつのかということが論じられていかねばならないだろう。審査委員会でも、そうしたさらなる問題が指摘された。逆に言えば、本論文はそうしてわれわれの前に刺戟的な新しい哲学問題の扉を開いて見せたのだと言えよう。

これまで記してきたことを含め、審査委員から出された疑問や要求はそのほとんどが本論文の先に開ける哲学問題に関するものであり、鈴木氏にとっては今後の課題となるものであった。そして、本論文において設定された問題の枠組の中において本論文が十分な成果をあげていることは、審査委員全員の認めるところであった。

以上より、本審査委員会は、鈴木徹也氏の学位請求論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。